

ICT 技術者の 存在感向上を目指して

会長 吉田 進



ICT（情報通信技術）の進展は目覚ましい。今や携帯電話は60億加入（世界人口は約70億人）を超え、世界中の人々の生活を一変させた。これからは人だけでなく膨大な数の機械や物、更にはセンサが無線ネット接続され、クラウドサービスの進展と相まって、世の中に革命的な変化をもたらす時代が来よう。とりわけ社会の効率化や異分野融合による新たな価値創出の源泉として、ICT技術に対する期待は大きい。高度道路交通システム（ITS）、医療・ヘルスケア、野菜工場から、いわゆるスマートシティ、持続可能な社会の実現に至る広範な分野への展開が始まりつつある。

また、東日本大震災ではICTがもはや社会のインフラであり、社会に不可欠な存在であることが改めて認識された。被災時に情報の断絶が生じたことは誠に残念ではあったが、関係者の尽力により迅速な復旧がなされた。被災時の教訓を踏まえ、肉声を確実に届ける「災害用音声お届けサービス」など一部の耐災害技術が整備されたほか、クラウドサービス、ネットワーク仮想化や小形衛星通信の活用促進策など数多くの耐災害技術の研究開発が進められている。

しかしながら、誠に残念なことに、ICT技術そのものに加えて、社会を支える数多くの先端システムの背後でICT技術が極めて重要な役割を果たしていることが、一般市民にはほとんど理解されていない。東日本大震災時に新幹線を救った「早期地震検知システム」はもちろん、自動車やロボットでさえ今やICT技術抜きには語れない時代であるが、ブラックボックス化され一般市民の目には見えにくい。既に多くの家電機器がインターネットに接続されている。ネットショッピングを楽しむ市民も多い。便利さだけでなく、時には危うさも潜むICT技術について正しく理解し、正しく使いこなすためのリテラシー教育が不可欠な時代になっている。ネット犯罪の報に接するたびに極めて残念に思う。得てして影の部分が強調され、その結果として、物づくりやそれに従事する技術者の社会的な評価が低くなっているのではなからうか。

ICTを標ぼうする本会としては、一般市民への周知啓発活動の一翼を担い、ICT技術並びにその果たしている役割、光と影、そしてその潜在的な可能性、利活用の促進について折りに触れて訴えていく必要がある。ICT技術並びに本会会員のたゆまぬ努力の“見える化”によって社会の成長エンジンとしてのICTの役割について理解を深めてもらい、利活用の促進につなげたい。一般市民の皆さんに我々の活動を正確に理解頂き、かつ社会が活性化してこそ、ICT技術者としての生き甲斐も生まれ、社会での存在感、ステータスの向上につながるのではなからうか。

なお、本会では2050年に向けたICT技術の将来ビジョン、更なる社会展開の可能性を示すロードマップを鋭意作成中である。これらの成果の公開により、多くの学生や若者、そして一般市民にまで、ICT分野に魅力更には夢を感じてもらい、その研究開発に理解を持って頂きたいと願っている。とりわけ、次代を担う若者にとってICT分野があこがれの職業になり得るように。

そういえばIEEEも“IEEE Day”を設け、その活動の“見える化”を進める一方、“Advancing Technology for Humanity”という標語を新たに打ち出している。本会としても、理念に沿った活動を推し進め、例え一歩ずつであれ、ICT技術者の存在感を高め、国民から敬われる存在になるよう、そしてそれによって若者の電気・情報離れを食い止め、社会の閉塞感を打破し、本会ひいては日本のICT分野、そして社会全体の活性化につながるよう努力を積み重ねてゆきたい。